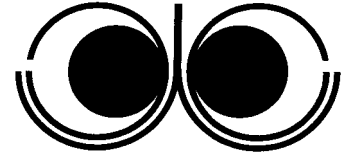


Newsletter No. 29

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.org>



December 12, 2004

巻頭言

日本語ウォッチング

楊 暁捷

「こていでんわ」、「かにゆうけんりょう」。これらのやや聞きなれない言葉をめぐって、わたしの「日本語ウォッチング」を記してみます。断っておきますが、カルガリーで暮らしていて、日本の雑誌や新聞などを読む機会はほとんどなく、日本との繋がりには、NHKのニュースを一日に一時間見ることぐらいです。

大学で二年生のクラスを担当していて、二週間ほど前のレッスンの内容は「電話」でした。電話番号の言い方から電話口での挨拶、文型や表現など一通り触れて、自然に日本の電話になります。いまや電話といえば携帯電話、しかも日本のそれほとにかく機能が盛りだくさんで、いつの間にか電話という名前ではまったく捉えきれないものになってしまいました。テレビニュースに登場したものから覗いてみても、書籍や新聞記事を読む、手帳や辞書を置き換える、携帯デジカメに早変わりする、というのは当たり前で、予想もつかない奇抜な機能も続々と現れてきます。たとえば、買い物の支払いや駅の改札に持ち出す携帯財布や携帯パス、大都会で放送され始めるデジタルテレビ番組を受信する携帯テレビ、三次元バーコードを読み取る携帯スキャナー、などなど、どれも目新しいものばかりです。圧巻は、街角に流されている音楽のメロディーを録音してしかるべきところにダイヤルすれば、タイトルや歌手などの情報をすべて教えてくれるというサービスまで

———— 目次 ————

◆巻頭言	
日本語ウォッチング.....	楊暁捷 1
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内	
.....	清水道子・鈴木美知子 3
会計報告	8
CAJLE 年史	9
◆年次大会報告	
2004 年年次大会を振り返って.....	西島美智子 10
年次大会アンケートのまとめ	サマレル史子 14
◆特別寄稿	
Garden City・ビクトリアへようこそ... 野呂博子	16
万年青年の「草の根日本語教育」.....	高橋和比古 17
◆連載	
短歌に詠まれた日本語教育の現場.....	鶴沢梢 19
日本事情の枠組み・・・日本語教育につなげるために	
.....	王伸子 22
◆カナダ各地の学校めぐりシリーズ (8)	
創立 55 周年を迎えた「トロント日本語学校」	
.....	ハウ博美 24
BULLETIN BOARD	西島美智子・王伸子 27
編集部便り	28

始まったと伝えられます。電話という名のツールを持たせて、消費の網は無限に広がっていくという、いかにも日本的な暮らしの風景を垣間見る思いがします。

ここに冒頭の言葉、「固定電話」に戻ります。以上のような華々しい携帯電話の活躍により、電話という言葉も大きな膨らみを持ち、家庭のなかに据え付けたそれは、いまや「固定」という言葉を添えないと、すぐには思いつかなくなる恐れまで出てきました。その固定電話が話題になったのは、いわゆる「加入権料」とセットになっています。加入権料とは、正式な用語では「施設設置負担金」と言って、電話を取り付けるときに支払う料金のことです。日本での短期滞在などでいつも難題の一つとなり、宿舎などに入居して、目の前に電話機まであるにも関わらず、常識はずれの金額を請求される経験をもつ人が多いでしょう。ニュースになったのは、この加入権料を廃止するということです。しかもその決定は、消費者に歓迎されるものではなく、不評や不満の声が上がっているとか。すでに固定電話を持っている立場から、固定電話の価値が下がるとの理由の

ようですが、いま一つ理解できません。これも日本で暮らしていないがために、物事の受け止め方に差が出る典型的な現われでしょうか。

言うまでもなく、初級の日本語学習者には以上のような情報は必要ではないでしょう。だが、わたしのクラスでは、このような言葉を二分以内の時間で英語で説明してあげる、というやりかたを取っていて、いまのところ好評なようです。言葉に込められた感情や位相は、実際に使ってみないと身につくものではありませんが、関連する情報の解説は、大学生には一つの学習の手がかりになり、違う社会生活を眺める楽しい視点になることを期待します。

同じクラスで、電話のレッスンに続いて乗り物を取り上げます。そこにテレビは、運転中の携帯電話使用を取り締まるニュースを伝えてくれました。三万五千人もの警察が一斉に出動して、六千人以上の違反者を検挙したとの報道に続き、その取り締まりへの対策となる携帯電話の付属商品「ハンズフリー」を取り上げました。NHK もなかなかユーモアを心得ています。このように、電話生活と車社会が思わぬ形でつながって、言葉が無限に広がっていきます。

日英の翻訳は20年の実績を持つ JCにおまかせください

- * 翻訳、通訳サービス (日英、英日)
- * 日英の名刺作成
- * 日英の DTP、印刷物、パワーポイント
- * 卒業証明書、戸籍抄本などの翻訳証明書付き翻訳
- * Web ページのデザイン、ローカライゼーション (日英)

日英、英日の翻訳者を募集しています。

Tel: 416.593.6118 Fax: 416.593.1871 shin@jpncom.com



JAPAN COMMUNICATIONS INC.
ジャパン・コミュニケーションズ

555 Richmond Street West, Suite 705, Box 500
www.jpncom.com Toronto, ON M5V 3B1

活動報告とこれからの活動案内

活動報告

2004 年度年次大会

2004 年度当会年次大会は、再びトロントに戻り、国際交流基金及び、同基金トロント日本文化センターの多大な援助協力をいただき、国際交流基金トロント日本文化センターを会場に 8 月 19 日（木）から 21 日（土）まで、3 日間にわたり開催された。なお、4 日目、22 日（日）は、自由参加による日帰りナイアガラツアーが実施された。

開会式には、在トロント日本国総領事館山口寿男総領事、及び、国際交流基金トロント日本文化センター齋木宣隆所長より祝辞をいただいた。

今年度は、「日本語教育—その指導法の充実」をテーマに、研究論文発表、カナダ、アメリカ、日本からの講師による研修会が行われた。なお、大会 2 日目の夜、トロント市内の中華レストランにて懇親会が行われ、テーブルを囲んでの和やかな会食ともに親睦を深めることができた。デザートコースに入る頃よりさらに、余興として、男女の軽妙な会話のサンプルスキットを東京の山の手ことばにはじまり、東北弁から関西弁、九州弁など、各地方弁にアレンジした即席カップルの熱演が披露され、如何にも CAJLE らしい大好評の会となった。毎日、昼休みには、昼食を食べながらの情報交換や、恒例の CAJLE 出版物の展示即売や、にほんごサークルおよび JPTrading の教材展示即売があり、これに加え、3 日目には 2 時間取り、部会展示・説明や、講師を囲んでの懇談会もあり、皆、大会最後の昼休みを有効に過ごした。

大会参加者計 102 名、連日 70 名を越える参加者があり、アンケートの回収率も大変良く、総合評価も「とても良かった」68%、「良かった」32%との評価を得て、成功裡に終わった。

年次大会プログラム及び、定例総会の詳細は次の

通りである。

研究論文発表

第 1・2 両日、午前 2 日間にわたり 2 会場同時進行にて、カナダ、アメリカ、日本はもとより、トルコ、スペイン、中国、韓国と、遠方よりの参加者もあり 24 の発表（内英語 1）があった。今回は、教育現場からの実践報告が多数あり、大会テーマを反映している感が強かった。

発表者、タイトルは以下の通り。

発表会場 1、19 日（木）

1. 眞崎睦子（北海道大学）「アメリカ中西部で教える日本事情—ロールプレーで学ぶイェー」
2. 大江都（マウント・アリソン大学）「クリエイティブ・ライティングの指導—初級レベルの学生が小エッセーを書くとき—」
3. 浅野真紀子（サンフランシスコ州立大学）「ひらがなの筆順習得にみる小テストの効用」
4. Kazuko Imaeda (Private Tutor, waterloo) 「An Effective Way to Teach Beginners Japanese to Non-Native speakers」
5. ライリー洋子（カルガリー大学）「現代日本新書を扱った読解教科書の作成」
6. 村上仁（香港城市大学）「中等日本語教育向け教材開発」
7. 内田クツロフ雪絵（ヒルフィールド・ストラタランカレッジ）「実践報告：<にほんごアート>を用いた楽しい絵教材の作成法と語彙導入の手法」

発表会場 1、20 日（金）

1. 原田登美（甲南大学）「学生が期待すること、習得すること、目指すべきこと—<多文化共生社会>の教育を視点とした<日本語教授法実習>—」
2. 奥村訓代（高知大学）「留学生獲得策としての日本語教員副選考課程の見直し—高知大学の場合」
3. 広瀬研也（チャナッカレオンセキズマルト大学）

「トルコにおける非母語話者日本語教師養成のための教育実習」

4. 原沢伊都夫（静岡大学）「日本語教師の非言語動作—学習者の視点から—」

5. 楊曉捷（カルガリー大学）「詞書のなかの言葉—絵巻きに中世の声を聞く—」

発表会場2、19日（木）

1. 公文素子（韓瑞大学）「日本事情教育における日本人の役割」

2. 柴田あづさ（佐賀大学／福岡女学院大学）「ブラジル日系青年にとっての日本語」

3. 竹井尚子（ブリティッシュコロンビア大学）「日系カナダ人にとっての日本語の存在と機能」

4. 岩田園美（ブロック大学）「ショートムービー・プロジェクト」

5. 金山貴美（ジョージアサザン大学）「川柳を取り入れた日本文化クラスの実践報告」

6. 三島幸子・藤岡典子（シンシナティ大学）「国際企業研修プログラム日本語クラス実践報告」

発表会場2、20日（金）

1. 天野修治（バルセロナ日本語センター アマノ ジュク）「有対動詞の自他の見分け方に関する一考察—日本語学習者自身が自他を識別する方法を探る—」

2. 藤村泰司（国際大学）「<て形>の作り方—<辞書形>派、<ます形>派に欠けている視点」

3. 永瀬治郎（専修大学）「キャンパス言葉の全国分布からみる言語変化のパターン分析」

4. 山本雅子（愛知大学）「テンス・アスペクト形式の体系的意味機能」

5. 下条光明（ニューヨーク洲立バッファロー大学）「目的格の<が>：<を>も使用可能な文について」

6. 張勤（中京大学／カルガリー大学）「要請言語行為を報告する表現<～てくれ>について」

教師研修会 教師研修会4セッション（各3時間）は、カナダ、アメリカ、日本からの講師により、さまざまな指導法、実践法が展開された。講師名及び

タイトルは下記の通り（プログラム順）

19日（木）午後 フォード丹羽順子（佐賀大学）「コミュニケーションのための日本語教育文法と練習のあり方」

20日（金）午後 江副隆秀（新宿日本語学校）「江副式教授法—文法指導の実践・視覚教材の導入」

21日（土）午前 英語によるワークショップ

宇田川洋子（国際交流基金派遣アルバータ州教育省）

「Activities and Strategies for Programs of Japanese Language and Culture」

21日（土）午後 片岡裕子（カリフォルニア州立大学ロングビーチ校）「日本語学習における批判的思考の指導」

22日（日）ナイアガラ日帰り旅行 企画：杉本陽子、リーダー：杉本陽子・サマレル史子

初秋を思わせる爽やかな好天に恵まれ、ガイド付きのバスはほぼ満席。車中、賞品つきの4人グループの氏名を使って「四字熟語作り」競争、ワインクイズ、ナイアガラ関連クイズなどが賑やかに展開され、ナイアガラミステリーツアーは、帰着後、麴の美味しい中華レストランでの夕食を楽しみ、無事終了した。

2004年度定例総会

西島美智子会長挨拶

この1年間、振興会の活動の柱である年2回のニュースレターと、本日会員に配布されたジャーナルCAJLE6号の発行、年次大会、部会活動を順調に進めてきた。特に、昨年は初めてカルガリーで年次大会を行い、今後さまざまな地域で年次大会を行っていく布石となった。さらに、来年は、ビクトリアで大会を行うことが決まっており、これから、文字通り、カナダを代表する日本語教育関係の学会として発展していくことを願っている。

1. 2003年度活動報告及び2004年度活動予定

(1) 2003年度年次大会及び定例総会（清水）

2003年度年次大会は、国際交流基金及びアルバータ教育省の援助を得て8月21日（木）より8月23日

(土)までの3日間にわたり、カルガリー大学を会場に開催された。研究論文発表会を2部立て同時進行とし発表本数を多くしたこと、また10名の講師による教師研修会及び特別講演会では、日本語文法と日本語教育、日本文学に至る幅広い研修内容で、参加者に興味深く印象付けた。日本語部会と英語部会の同時進行とした英語話者への配慮や特別セッションでは、パネル形式で大学、高校クレジット、継承語教育等の日本語教育多様性の発表、教材展示・即売、市内の中華レストランでのなごやかな親睦会、川口義一先生の「のこぎり演奏」、自由参加のバンフ日帰り旅行など、大会参加者85名を得て盛会であった。(詳細はニュースレター27号参照)

2003年度定例総会は、8月21日(木)カルガリー大学にて開催、西島美智子会長の挨拶、桶谷仁美議長から2002年度～2003年度現理事・役員を紹介が行なわれた。(詳細は、ニュースレター27号参照)

(2) 2003年度部会活動及び2004年度活動予定

1. 2003年度3部会合同活動報告及び2004年度活動予定(鈴木)

年少者・高校・成人3部会は、引き続き合同形式で昨年度の活動目標を継続させ、トロント移住者協会日本語プロジェクトとも提携しつつ活動を実施した。

その1. 2回連続文法講座 その2「いくつかの文法事項の効果的な教え方」

2003年9月14日(日)午後、トロント日系文化会館AJCコートにて金谷武洋講師による文法講座その2を開催した。参加者数42名、にほんごサークルによる教材展示即売あり。(詳細はニュースレター27号p.6参照)

その2. ワークショップ形式による勉強会

2003年11月30日(日)午後、トロント日系文化会館AJCコートにて、会員による2つのワークショップを実施した。

- a.) 「初級～中級クラスで役立つゲーム」ハウ博美
- b.) 「サイコロの活用」鈴木美知子

参加者を巻き込んだ実践形式であり皆積極的に参加し、引き続き予定されていた意見交換会の割愛をせざるを得なかった。参加者数34名、にほんごサークルによる教材展示即売あり。

その3. 本邦派遣日本語学校研修生報告会・文法講座

2004年2月29日(日)午後、トロント日系文化会館AJCコートにて、トロント移住者協会日本語プロジェクトと共催で開催した。

第一部：本邦派遣日本語学校研修生報告他
2002年度研修に参加した日加学園生徒の報告、報告者の保護者による家庭での日本語使用状況や方針の発表、次回研修(6月)に参加予定の日修学院生徒による応募の動機や日本語学習状況についての発表。

第二部：文法講座「日本語初級クラスの指導過程」
日本語プロジェクト担当者からも強い要望があり、三たび金谷武洋講師による講座であった。参加者52名、にほんごサークルによる教材展示即売あり。(詳細はニュースレター28号p.3参照)

今後の活動予定

今年度は以上3回の活動であったが、日本語サークルによる教材展示販売も毎回実施され定着した。今後も引き続き同じ目標にて3部会合同形式で勉強会を続け、同時にトロント移住者協会や国際交流基金トロント文化センターとも協力し合いつつ変動期にある年少者部会や高校部会の在り方についても検討、模索していく予定。

2. 大学部会(金谷)

大学部会では、ジャーナルCAJLE6号の発行と、部会発表を行なった。研究発表では、昨年のカルガリー大会で2教室同時進行を行なったが、参加者が増加した1つの大きな要因だったと思う。前年度大会発表者、奥村訓代氏(高知大学)、村上仁氏(香港城市大学)他、数名あり、リハーサルセッションを1コマずつお願いした。昨年は25名も発表者があり、今年は24名の発表者を得た。バルセロナ、トルコからの遠方の発表参加者があり、だんだん外に開いて

きているという違いが見えてきてうれしかった。要旨集については、谷原氏の援助を得て参加者に無事配布できた。発表時間は、それぞれきっちり時間内で終わらせた。その他コメントがあればお知らせいただきたい。

(3) ニュースレター (楊)

昨年の夏から、ニュースレターのメンバーが変わり、谷原、杉本、サマレルと私の4人の編集となった。印刷のフォームなど見た目は変わっているが、担当者の経験と、従来 of 伝統を守って編集に努めた。ニュースレターを会員全員の交流の場にしたいと思っているが、この総会時にやっとニュースレターが出て来る程で、ニュースレターが話題に載らないのが現状である。編集の際会員に書いてくれるよう依頼すると気持ち良く書いてくれるが、頼まないと全然書いてくれない。27号では、懸賞の形で募集を試みたが、1人も反応がなかった。今後何らかの作戦がほしいと願っている。昨年12月に27号、今年6月に28号を刊行した。電子バージョンでの発行、及び従前通り会員全員に印刷したものをトロント事務局より発送した。発送作業をトロント事務局に任せているが、電子メールなど利用して作業を減らし、コストを節約できるよいアイデアがあれば教えて欲しい。また、28号から広告が入って、内容も充実してニュースレターらしく整ってきた。

(4) ジャーナルCAJLE (桶谷)

今年から印刷所がトロントのTPH The Printing Houseに変わった。査読者に金谷武洋氏が加わって6名となった。投稿者は14名あり、狭き門で、そのうち8名が採用となった。次回は12月締切りで規定が少し変更しているの、読んで是非投稿していただきたい。

(5) ウェブサイト (鵜沢)

今年度の発展事項はニュースレターをまるごとPDFファイルで載せて会員以外の方にも読んでいただけようにしたこと、及びKCPとの相互リンクが加わり、相互リンクが8つになったことである。

(6) OBC貸し出し状況報告 (鈴木)

2003年度大会終了時、日本からの参加者に貸し出し、以後、11月、12月にアメリカから各1名、2004年に入り5月にアルバータ州から借用希望がありました。今年度の貸し出しは計4名、総て回収済みです。いずれも損傷なく丁寧に扱われ、速やかに返却されました。2002年4月貸し出し開始以来、利用者総数9名となりました。

2. 2003年度会計報告及び2003-2004年度予算案 (中尾・渡並)

- ・2003年度会計報告が収支項目に沿って報告された。
- ・2003-2004年度予算案が提出され、出席者からの質疑応答及び繰り越し収入年度を2003年に、予算案年度を2005年に訂正された後、報告の承認と予算案が拍手で可決された。

3. 2003年度理事会決議事項報告及び承認:

(1) 年次大会のテープ録音及び保管に関する報告及び承認 (清水)

年次大会における記録のテープをとることに關して問題が生じた。2003年度の大会時にテープを録音することに異議の声があったので、それに関して今年の大会の初日に金谷武洋氏から、あらかじめ出席者一同の承認を得た。しかし、本日総会に出席された方々に、ここで改めて承認を得たいと思う。

承認事項:「テープは記録のためにとり、CAJLEの事務所に保管する」出席者一同拍手で承認可決。

(2) 会計事務所の変更にとまなう決議事項の報告及び承認 (中尾)

会計事務所の変更-会計事務所への出費が大きく、年間2000ドルも支払うので同じプライス・ウォーターハウスに勤めている公認会計士、リサ・ルー氏に謝礼の形で半額くらい支払うことをお願いすることになった。これについて承認を得たい。出席者一同拍手で承認可決された。

4. 理事選出: 2004年~2006年 (桶谷議長)

桶谷仁美議長より旧理事、役員 of 15名が紹介された。理事は規約では13名から15名までの構成から

なる。新理事は同15名で出席者一同の拍手を得て承認可決された。(50音順位)

鶴沢梢、王伸子、桶谷仁美、金谷武洋、サマレル史子、清水道子、杉本陽子、鈴木美知子、谷原公男、渡並美和、中尾良子、西島美智子、野呂博子、古屋賀子、楊曉捷

年次大会(総会)後の移動報告:第1回臨時理事会オンライン (Nov.23, 2004. 1-4)

1. 新理事及び役員との移動:鶴沢梢氏及び古屋賀子氏は個人のご都合により理事を辞退され、大江都氏、村上陽子氏が新理事として就任された。新役員(2004年~2006年)の構成は下記の通りに決定した。

(Nov.23.2004.1-3)

会長代行 王伸子 副会長 桶谷仁美 書記 清水道子、鈴木美知子 会計 中尾良子、渡並美和子

ジャーナル編集部: 桶谷仁美(編集部長)、谷原公男、王伸子、坂本光代

広報部: 部長 楊曉捷

ニュースレター 楊曉捷、西島美智子、杉本陽子、清水サマレル史子

ホームページ 楊曉捷、西島美智子、中尾良子、ジェーン・リウ

宣伝・広告 王伸子、杉本陽子、中尾良子

発表企画部: 金谷武洋、谷原公男

(ウェブサイトホームページに名称変更: Nov.3, 2004.)

2005年度年次大会実行委員: 野呂博子(実行委員長)、ジョセフ・ケス、リディングトンのぞみ、木村美香

2. 総会承認事項3-2で、すでに承認済みの振興会会計士リサ・ルー氏がロスアンゼルスに栄転することになったため、新たに公認会計士として、同じくプライス・ウオーターハウスのフローレンス・リアング氏にお願いすることに決定した。(Nov.23, 2004.4)

これからの活動案内

1. 今後の部会活動

合同部会として活動してきた年少者部会・高校部会・成人部会について、今後の活動の可能性として、講師が機会があつて訪問すると、その地域で、その講師を中心に勉強会を持ったとき、トロント以外のオタワ市、ウォータールー市、セントキャサリン市他近郷地区から参加してくる。会の活動を前向きにとらえ、将来アトランティック部会、日本部会、東アジア部会など、部会活動の輪が多層に世界に広がることを期待し、その最初の部会として名称をオンタリオ部会と改める。なお、活動は従来通りであり、各部が将来、独立した活動を行なう必要が生じた場合のため、かつ、それぞれのレベルで、他の地域と横のつながりができる可能性を残すことなどを考慮し、下部組織として年少者、高校、及び成人部会は温存する。今後広く各地域で自主的に活動が開始されることを大いに期待する。

2. ホームページ

ホームページ委員長 楊曉捷

9月に入り、ホームページ委員会においては、次の作業を行なった。CAJLEのサイトは新たにドメインの名前を取得した。 <http://www/cajle.org/>

どうぞ、一度内容をご覧になってください。CAJLEのサイトの新たなデザインや内容の拡張など、ホームページ委員会でこれから作業を進めたいと思います。

3. ニュースレターへの寄稿・記事掲載について

CAJLE編集部からのお願い

ニュースレター編集委員会

ニュースレターに原稿を掲載させていただくにあたり、以下の事項に関してお願いいたします。なお、ご不明な点等ございましたら、いつでも編集部までご連絡下さい。

1) ローカルの新聞等を含め、他の出版物にて未発表のオリジナル原稿をお願いします。

2) 著者からの転載希望(インターネット上の公開を含めて)があつた場合には、CAJLE ニュースレター

での掲載を明記することを条件に、すべて許可を与えます。また、他の出版物、組織、機関より転載希望を受けた場合、著者の意向を確認した上で、編集部でその可否を決定します。

3) ニュースレターは、全文インターネットで公開することをご承知下さい。

4. ジャーナル編集

編集作業の流れ (2004年～2005年)

ジャーナル編集委員長 桶谷仁美

12月1日 論文応募締めきり、入会手続き確認、査読者決定、査読者へ論文郵送→3月 査読結果締めきり、論文投稿者へ査読結果連絡→4、5月 編集、英語論文：校正、フォーマット、プルーフリード、日本語論文：校正、フォーマット、プルーフリード、掲載料受け取り確認→6月 掲載論文募集ニュースレターへ

(日本語)、編集締めきり (6月30日)、広告締めきり作成/フォーマット→7月 印刷所との最終打ち合わせ：表紙、背表紙作成、バーコード、ISSN手配、最終フォーマット、PDFにて印刷所へ原稿送付送付→8月 大会参加の会員へ配付。

5. 2005年度年次大会

2005年度年次大会は、8月19日(金)ー22日(月)、ビクトリア大学にて開催の予定です。日本語教師研修会をはじめ、研究発表(同時進行可)、パネル形式シンポジウム、情報交換など行なう予定です。また、最終日には、オプションツアーの市周辺の観光も計画しております。多くの方々のご参加をお待ちしています。

文責：(書記) 清水道子・鈴木美知子

会計報告			
		2004	2003
Canadian Association for Japanese language Education		Expenditures	
Statement of Revenue and Expenditures and General Operating Fund		Workshop (Schedule)	21,131 17,145
		General and administrative	4,665 4,290
		Professional fees	227 1,980
			<u>26,023 23,415</u>
<i>For the year ended March 31, 2004</i>		Excess (deficiency) of revenue over expenditures for the year	2,108 (1,315)
	2004	2003	
Revenue		General operating fund - beginning of the year	20,800 22,115
Grants and workshops		General operating fund - end of year	22,908 20,800
Grants from government agencies and other		Schedule of Workshop Expenditures	
	11,400	12,400	For the year ended March 31, 2004
Workshop participants' fees and other		Lecturers' Honoraria	2,748 1,200
	10,179	4,673	Accommodation & transportation
	<u>21,579</u>	<u>17,073</u>	11,775 11,737
Memberships fees	6,550	4,986	Meals and refreshments
Donations		38	4,656 2,388
Interest	2	3	Correspondence and photocopy
	<u>28,131</u>	<u>22,100</u>	1,430 1,434
			Equipment rentals
			522 386
			<u>21,131 17,145</u>

《 年 史 》

2003年度	主な活動と内容	(2003年8月-2004年7月)
2003年		
8月21日 -24日	2003年度年次大会 (カルガリー大学) 後援国際交流基金、アルバータ教育省 大会企画委員長: 鶴沢梢 大学部研究論文発表会(注1) 第1日 (Rm. 164): 柴田あずさ(佐賀大学) 菅野和江(ハワイ大学) 原澤伊都夫(静岡大学) 鶴沢梢(レスブリッジ大学) 畔上ラム智子(リジャイナ大学) シュナイダー恵子(アルバカーキTIVコミュニティ・カレッジ)、第1日 (Rm. 126): チョン・サンミ(早稲田大学) 立間智子(早稲田大学) 藤原美保(ウイラメット大学)・竹井光子(広島大学) 三浦秀松、谷原公男(ニューヨーク州立大学バッファロー校) 上野善道(東京大学)、第2日 (Rm. 164): 藤岡典子(シンシナティ大学)・中窪高子(アイオワ大学)、田島毓堂(名古屋大学) 金山貴美(ジョージアサザン大学) 村上仁(香港城市大学) クリス・シェパード(早稲田大学)・木下直子(明海大学)、青木恵子(クイーンズ大学) 川口義一(早稲田大学)、第2日 (Rm. 126): チェ・ジョンミン(早稲田大学) 浅野真紀子(サンフランシスコ州立大学) 戸田貴子(早稲田大学) 王伸子、永瀬治郎(専修大学) 星真由実(カルガリー大学) 現職教師研修会: 23日は、午前及び午後2教室を使い日本語部会と英語部会同時進行。	
21日	「教師の文法知識と日本語教育」講師: 曾我松男(名古屋外国語大学)、「日本国内の日本語教育の現状」講師: 二通信子(北海学園大学)	
22日	現職教師研修会、「第2言語としての日本語教育」講師: 當作靖彦(カリフォルニア大学)、「絵巻というタイムスリップの快樂」講師: 楊曉捷(カルガリー大学)	
23日	日本語部: 特別セッション テーマ「日本語教育の多様性」発表者「カナダ特に振興会をとりまく日本語教育の現状」西島美智子、「北米における日本語継承語教育の現状とその将来」桶谷仁美(注2) 「日本の漫画家と西洋文学の影響」講師ライリー洋子(カルガリー大学)、「日英語対照研究: {ある(なる)/する}と{こと/もの}の関係を巡って」講師 金谷武洋(モントリオール大学) 英語部: 「Games and Activities from Down Under」講師: 宇田川洋子(国際交流基金派遣アルバータ教育省)、「Understanding How to Use Japanese Expressions: Culture behind the Language」講師: 西島美智子(ニューブランズウィック大学)、「Ten Tips to Help Your Students Improve Their Japanese」講師: サマレル史子(カルガリー大学)、「Japanese Language Education in Australia」講師: 宇田川洋子	
21日	2003年度年次総会(同会場) 実質会員数 119名。 ・西島美智子会長より挨拶。・2002年度活動報告及び2003年度活動予定。 ・2002年度会計報告承認及び2003年度予算案提出と承認。 ・現理事紹介-西島美智子・金谷武洋・桶谷仁美・鶴沢梢・古屋賀子・清水道子・鈴木美知子・中尾良子・渡並美和・王伸子・杉本陽子・谷原公男・楊曉捷・サマレル史子の15名	
21日	教材展示及び販売	にほんごサークル
-23日	CAJLE 出版物展示及び即売(注3)	カナダ日本語教育振興会
	教材・参考資料展示 / 案内資料展示、KCP インターナショナル語学研修院 / 国際交流基金	
23日	特別講演会(一般公開) 「日本語教育のための語彙詳細コードの提案(付. 比較語彙論の概要)」講師: 田島毓堂(名古屋大学)	
24日	オプションナルバンフ日帰り旅行	
9月14日	その1. <u>2回連続文法講座</u> : 「いくつかの文法事項の効果的な教え方」(注4) 講師: 金谷武洋	
11月30日	その2. <u>ワークショップ形式による勉強会</u> a. 「初級~中級クラスで役立つゲーム」ハウ弘美(トロント日本語学校) b. 「サイコロの活用」鈴木美知子(元トロント国語教室) 会場: トロント日系文化会館	
12月1日	ニュースレター 27号発行	編集長: 楊曉捷(カルガリー大学)
2004年		
2月29日	3部会による勉強会:(会場: トロント日系文化会館 AJC コート) 第1部: 本邦派遣日本語学校研修生報告会: 村井頌子(日加学園)、中村小春(日修学園) 第2部: 「日本語初級クラスの指導過程」講師: 金谷武洋(モントリオール大学東アジア研究所)	
6月10日	ニュースレター 28号発行	編集長: 楊曉捷(カルガリー大学)
注1. 二教室を使い同時進行。詳細NL27号参照。コーディネーター: 金谷武洋 注2. 特別セッション パネリスト: 王伸子、桶谷仁美(イースタンミシガン大学) 川口義一、谷原公男、田伏素子(イースタンミシガン大学)、西島美智子。報告資料提供者: ①「カナダの日本語継承語教育、オンタリオ州を中心に」鈴木美知子 中尾良子(ヘリテージ・ラングエッジ・プログラム) 清水道子 渡並美和(高校生プログラム) 杉本陽子 古屋賀子(インターナショナル・ラングエッジ・プログラム) ②「アメリカの日本語継承語教育」桶谷仁美 注3. 「ジャーナルCAJLE 1、2、3、4、5」、「子どもの会話力の見方と評価」-パイリンガル会話テスト(OBC)の開発(展示のみ)、「継承語としての日本語教育-カナダの経験を踏まえて」注4. 日系文化会館。		

年次大会報告

2004 年年次大会を振り返って

大会実行委員長 西島美智子

はじめに、2004年8月にトロントで行われた年次大会が、合計100名を超える参加者を集めて盛会に終わったことを、大きな喜びと安堵とともにご報告いたしたいと思います。毎年行っているこの年次大会は、CAJLEの活動の柱となっており、会員や関係機関の方々が顔を合わせて、さまざまな意見や情報の交換を行うための、年に一度の機会です。それだけに準備にも時間をかけ、充実したプログラムを作成することが実行委員会の使命となります。そして大会が始まり、皆さまから「参加して良かった」という声をいただけることが、私たち実行委員にとっては何よりも嬉しいことなのです。

では、2004年年次大会に向けて、どのように準備を進めてきたか、振り返ってみたいと思います。通常、翌年の大会の準備は、その年の大会期間中に行われる理事会で話し合いが始まります。今年の大会についても、昨年のカルガリー大会実施とともに準備が始まったと言っていいでしょう。CAJLEのカナダ国内会員は全国に広がっており、各地域での日本語教育活性化のためにも、大会開催地を移動させていく必要性を認識し、その第一歩としてカルガリー大会を実施するに至りました。これは大きな成果となり、地元、アルバータ州から多くの参加者があったことも、今後の励みとなりました。その一方で、遠方の州からの参加者が減ってしまうことも否めません。特に振興会の本部事務局があるトロントでは、日本語教育に携わっている方々の数も多く、部会活動として勉強会などを行う時にはたくさんの参加者を集めているのですが、遠方で大会開催となると、やはり参加者は限られてしまいます。そこで、2004年の大会開催は再びトロントで、という強い希望が

出されました。特にトロント事務局の役員理事一同から「がんばります！」という力強い声上がり、私が実行委員長に指名された次第です。

9月になって具体的な話し合いを進めることになったのですが、その時点で初めて「大変な役目を引き受けてしまった、、、」と実感しました。それまで、桶谷仁美氏や鶴沢梢氏が実行委員長を務められる中、私も会長として一緒に準備を進めてきたのですが、準備の流れや手配など、実行委員長がリーダーシップをとって進めてくださっていたわけですから、私は全体を眺めて調整をお願いするだけで良かったのです。ところが今度はそうはいきません。早速、企画準備小委員会を発足させ、チームワークの力を拝借することにしました。力強い声を上げてくださったトロント事務局の清水道子、杉本陽子、鈴木美知子、渡並美和、中尾良子、古屋賀子各氏、さらに、3年連続で実行委員長を務められた「記録」をお持ちの桶谷氏、研究論文発表の部から代表で金谷武洋氏に参加を仰ぎ、企画準備が始まりました。

まず初めに行う重要なことは、12月1日締切の国際交流基金助成金申請に向けて、申請書を作成することでした。これは、海外日本語教育ネットワーク形成助成金と呼ばれているもので、毎年年次大会を開催するにあたって、大変お世話になっております。特に大会のハイライトの一つである教師研修会に、カナダ国外から講師の方々を招聘することができるのも、この助成金のおかげなのです。申請書には、大会のテーマ、プログラムの日程とその内容、開催に必要な予算などを記載する必要がありました。そこで、大会のテーマを決める前に、トロントおよびその周辺地区での日本語教育のニーズを分析し、ど

のような研修会を行いたいのか、どなたに講師をお願いしたいかなどを話し合うことから始めました。そして、日本語教育の現場にいる人達は、常に、何をどのように教えるかという課題に取り組んでいて、そのためのアイデアを求めているということから、古くて新しい課題である「日本語教育-その指導法の充実」を大会のテーマとすることに決定しました。そこから、講師をお願いする方々の候補を上げていき、具体的な研修内容と合わせて、検討を重ねていきました。

もう一つ論点となったことは、英語による研修会を行うかどうかでした。カルガリー大会では、日本語が母語でない日本語教師を対象に英語による研修会を設け、良い反響を得ることができました。このような方々に研修の機会をもつていただき、日本語の母語話者である私たちとの交流の場を提供できるのは、大変喜ばしいことです。そこで、今年は両者が一同に集まって、同じ研修を受ける機会を設けることにしたわけです。

研究論文発表の部については、昨年試みた2部屋同時進行の形式を継続するかどうか、大きな焦点でした。すべての発表を聞くことができないという欠点がありますが、2部屋同時進行を行うことによって、より多くの会員に研究発表もしくは実践報告の機会をもつていただくことができ、少しでも多くの方々に大会に参加していただけるというのは、何と言っても魅力です。ここで考慮すべきことは、会場の状況でした。すでに会場提供をご快諾くださっていた、国際交流基金トロント日本文化センターとの打ち合わせは、斎藤典子氏と行いました。センターに備わっている機材の確認、どのような形で2部屋同時使用が可能かなどを伺い、その結果、今年も2部屋同時進行で研究論文発表を行うことに決定した次第です。

大会の骨子が決まり、予算の見積もりを立てて、助成金申請の書類を提出した後は、大会実行委員となる役員理事全員の役割分担を決め、準備の段取り

を確認することでした。CAJLEのホームページに大会のお知らせを載せ(担当:鶴沢氏)、研究発表論文募集のお知らせを作成して、各方面に連絡をしました(担当:谷原公男氏)。さらに、4月末に論文募集が締め切られ、助成金の申請結果が届くまでの間、研修会の講師をお願いする方々との連絡や打ち合わせを行ったり、杉本氏を中心に日帰り旅行の計画を立てたり、中尾、渡並氏を中心に会計に関する準備などを行いました。

そして、5月となりました。研究論文発表には25名の方々から応募が届き、待ちに待った助成金も、助成確定という朗報が届く結果となりました。これで、いよいよ準備も本番です。応募論文の審査、発表決定者との連絡、要旨集の作成は、金谷、谷原氏の分担で行われました。また、ニュースレターの発送に合わせて、大会プログラム、研究論文発表プログラム、そして教師研修会紹介を、それぞれ、谷原、渡並氏、私の担当で作成しました。同じく同封物として、宿泊施設案内、交通機関、会場周辺の地図、日帰り旅行の案内、懇親会へのお誘い、その他事務的な書類の作成などは、トロント事務局の役員が準備の役どころでした。また、これらの情報をホームページに載せる作業は引き続き、鶴沢氏の担当でした。さらに、日本語が母語でない日本語教師へのお知らせは、国際交流基金の斎藤氏の協力を得て、スムーズに行うことができました。

次なる目標は、7月末から8月初めにかけてまとめる参加申し込みです。これだけ時間をかけて準備を進めても、参加してくださる方が少ないのでは大会の成功も危ぶまれます。一日参加も受付けた関係で、その日によって参加人数は異なるものの、各日70名前後の申込みが集まり、大変良いスタートとなりました。これに、当日参加の方が加わることになるはず。また、第四日目のナイアガラ日帰り旅行の申込みも20名を超え、大型バスの手配ができる状況となりました。これで弾みがつき、実行委員一同、大いに張り切って最後の手配や準備を進めることが

できました。特にこの時期は、トロント事務局の役員が大忙しです。お弁当やテーブルの手配、飲み物や事務用品などの用意、会場での受付に必要な備品リストの作成、会計のまとめ、総会準備等々、漏れがないか確認しながらの作業が続きました。また、アンケート用紙の作成は、サマレル史子氏の役割でした。

研究論文発表の部は、例年、都合で出席できなくなる発表予定者が出るので、発表プログラムや要旨集を大会間際で調整しなければなりません。この「ドタキャン」は仕方のないものなのですが、どのくらいドタキャンが出るかによっては、発表プログラムを大幅に変更しなければならなくなりますから、最後まで気が抜けません。ところが、今年のドタキャンは1人のみという好調さでした。しかも、発表者はカナダ国内はもとより、過去最大の7カ国から集まるという快挙です。

そして、いよいよ大会前日となりました。会場設定や受付の準備を行った後、プログラム進行の最終打ち合わせを行いました。都合により大会に参加できなかった2名を除く役員理事13名、それにアシスタントをお願いした蜂谷氏それぞれの作業分担を確認して、当日の幕開けに備えました。また、教材展示販売をされるにほんごサークルおよび JAPAN PUBLICATIONS TRADING の担当の方々も準備を終えられました。この日の会場準備の間、斎藤氏には終始協力をお願いし、機材の運搬や設定などにご尽力いただきました。

プログラムは予定通り進むだろうか、何かハプニングが起きて困ることはないだろうかなどと考えると、不安や緊張は高まるものの、一年かけて準備してきたものがこの4日間に集約されるのだと思うと、感慨も一入でした。

第一日目の朝は、久しぶりでお会いする方々、新しく参加される方々が次々と到着され、本当にこれから大会が始まるのだと実感する瞬間です。在トロント日本国総領事館から山口寿男総領事、そして国

際交流基金トロント日本文化センターから齋木宣隆所長をお迎えして、開会式のご挨拶を賜り、大会の幕開けとなりました。

それに続いて行われた研究論文発表は、発表者の中から事前をお願いしておいた方々が司会進行をしてくださり、大変良い雰囲気が進んでいったと思います。発表の内容も多岐に渡り、研究論文のみでなく、現場における実践報告も多く含まれていたことが、今年の発表の特徴だったと言えるでしょう。ただ、念入りに準備をしても、本番でうまく行かないことはあるもので、コンピューターなどの機器のトラブルがあったり、発表者の声が後ろまで届かないという場面もありました。

昼休みの休憩に引き続き、佐賀大学のフォード丹羽順子先生による教師研修会が行われました。実は、フォード丹羽先生は体調を崩され、入院生活もしておられたことから、研修会当日までお体の状態を気かけながら打ち合わせをしていました。しかし研修会が始まると、生き生きと、コミュニケーションのための日本語教育文法についてお話を進めてくださいました。病院のスタッフとのやりとりの間にも、どういう表現でコミュニケーション活動が行われているかを観察し、日本語研究の対象とされていたことには、頭が下がる思いでした。

第一日目は、受付作業も忙しく、参加者からの問い合わせも多いことから、主催者にとっては大変な一日で、この日が終わるとほっとします。しかし、第二日目は総会や懇親会も加わって長い一日になるので、まだまだ気は抜けません。午前中の研究論文発表が終了したあとは、発表者の方々もほっとされたのでしょう。昼休みにはお弁当を召し上がりながら歓談したり、教材展示販売を利用したりして過ごされる方々を多く拝見しました。そして午後の研修会は、新宿日本語学校の江副隆秀先生による教授法の模擬授業が行われました。日本語が全くわからない模擬学生5名を前に、独自の教授法を展開してくださったのですが、45分間の模擬授業のあいだに、

日本語が全く話せなかった人達が、単語レベルから文章へと次々に発話していく過程を目の当たりにしました。それに続いて、文法指導や視覚教材の導入などについてお話いただき、リズム感のあるダイナミックな研修会となりました。

総会も無事に終了した後は、お楽しみの懇親会です。チャイナタウンのレストランで行われたこの夕食会には、お忙しいスケジュールのため、大会初日からお越しいただけなかった研修会講師の方々も揃い、皆さまと歓談していただくことができました。また、在トロント日本国総領事館から高橋昌明首席領事、国際交流基金トロント日本文化センターから齋木所長、久保田徹副所長、斎藤氏にご出席いただき、賑やかな集いとなりました。食事をしながら各テーブルでの歓談も盛り上がった頃、懇親会担当の鈴木、中尾氏の司会進行で余興が始まりました。あらかじめ準備されたスキットをさまざまな方言で展開していくという趣向だったのですが、次々と指名を受けた参加者の「熱演」に、会場は爆笑の渦となりました。CAJLEの楽しい雰囲気をも十分に発揮することができ、お開きにするのが名残惜しいほどでした。

大会もいよいよ第三日目となり、大会会場で行うプログラムの最終日となりました。午前中は国際交流基金派遣アルバータ州教育省の宇田川洋子先生に、英語によるワークショップを行っていただきました。実は、日本語が母語でない方のこのセッションへの参加は、最終的に1名のみとなり、しかもその方は日本語がじょうずな方ということで、日本語での研修に切り替えてはという提案も出されました。しかし、日本語が母語の参加者の中には、英語の申込書を提出された方も数名おられ、英語でのワークショップを期待して参加された方もいらっしゃるはずで、何より、すでにプログラムに記されている内容に「偽りあり」となってはいけないという判断から、予定通り、英語で行っていただくことにした次第です。宇田川氏は、「Activities and Strategies for Programs

of Japanese Language and Culture」をテーマに、大変良く準備された資料に沿ってお話を進めてくださり、私たちはさまざまな教科書を手にとって、話し合いをする機会をもちました。宇田川先生の英語での説明は、どなたにも分かりやすかったことと思います。

この日の昼休みは、少し余分に時間をとり、トロントを中心に活動を行っている部会の展示およびハウ博美氏による発表がありました。それに引き続き、4名の研修会講師を囲んでのインフォーマルな話し合いが行われました。日本語教育の現場から情報や質問を出していただき、講師の方々に意見やアドバイスを伺いながら進めていきましたが、せっかく盛り上がってきたところで時間切れとなってしまったのは、残念でした。

最後の研修会は、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校からおいでいただいた片岡裕子先生に、「日本語学習における批判的思考の指導」についてお話をいただきました。片岡先生は、これまでもCAJLE年次大会の招聘講師候補としてお名前が上っていたのですが、先生のご都合がつかず、今回やっと実現した経緯があります。「批判的思考」というと何やら大掛かりに聞こえますが、片岡先生は、たとえば名刺やおにぎりについてクラスで紹介する時、ただ、こういうものです、と言って見せたり英語訳を言うだけでなく、その意味や価値、利用のアイデアなどを話し合い、どうしてかを考えさせることの大切さを大変分かりやすく指導してくださいました。気さくなお人柄でエネルギッシュに活躍されている片岡氏ですが、クラスで役立つものをテキパキと提示して下さったのが、大変印象的でした。

これで、国際交流基金トロント日本文化センターを会場とするプログラムがすべて終了しました。ここで一旦閉会とさせていただいた後、参加者の方々にもご協力いただいて、早速、会場の後片付けに取りかかったわけですが、何だか終わりにしてしまうのが惜しい気さえました。そして、研修会講師や参加者の方々とゆっくりお話をするのは翌日の日帰

り旅行の時のお楽しみとして、役員理事は、年に一度の定例理事会を行うために、本部事務局のあるオフィスへと向かいました。

第四日目は気分も新たに、ナイアガラ瀑布とその周辺の見物です。参加者は33名となり、大型バスで移動するにはちょうど良い人数となりました。この日のツアーリーダーは杉本氏で、この日のためにさまざまな準備がなされていました。また、昨年のカルガリー大会ですっかりバスガイドとしての技量を発揮されたサマレル氏は、ツアーのアシスタント役です。すばらしいお天気にも恵まれ、いよいよ出発です。バスツアーは朝食のマフィンとジュースで始まりしました。残念なことに、(何と!)バスのマイクが盗まれてしまったとのことで、ガイドの方や杉本氏が声を張り上げての説明となったのは、予想外でした。ナイアガラ地区に到着するまでの約1時間半の間、クイズやゲームをして楽しく過ごした後、ワイナリー訪問、ナイアガラ・オンザレイク散策を経て、ナイアガラ瀑布のある公園に到着しました。天気の良い日曜日とあって、車や人でいっぱいでしたが、展望の良いレストランで昼食をとったり、霧

の乙女号に乗船したり、テーブルロックで滝を間近に眺めたりして、時間はあっという間に過ぎていきました。途中、迷子になって集合時間に遅れる人が出たり(すみません、、、)、トイレに行っていて、バスのピックアップの機会を逃してしまった人が出たり(!)と、ハプニングはありましたが、トロント帰着後に杉本氏の先導でまとまったチャイナタウンでの夕食とともに、皆さまには思い出に残る一日となったことと思います。

これが、今年の年次大会の大まかなまとめです。ご協力いただいた関係機関・団体の方々に、この場をお借りして深くお礼申し上げたいと思います。また、研究発表をされた方々を含め、大会に参加いただいたすべての方々に感謝いたします。そして、大会の企画・準備・実施に向けて多大なる貢献をしてくださった実行委員会のメンバーに、大きな拍手を送りたいと思います。最後に、実行委員代表として、大会全般の司会をしていただいた古屋氏が、9月中旬に無事、女の子を出産されたことをお伝えして、大会のまとめを締めくくりにいたします。

年次大会アンケートのまとめ

サマレル史子

8月にトロントで開かれたCAJLE年次大会の最終日、アンケートのまとめ役の私に47枚の分厚いアンケート用紙の束が渡されました。その晩、冒険小説を読む前のような、スリルいっぱいのワクワクした気持ちで一枚一枚ページをめくり始めましたが、最後の一枚を読み終えた時には、暖かいファミリー小説を読んだ後のようなほのぼのとした気持ちになっていました。参加者の皆様のコメントを読んでいて、この振興会は大きな家族みたいだとつくづく感じました。そういえば、アンケートにも「アットホーム」

「なごやか」「暖かい」という言葉が目立ちました。

参加者の方々の感想を役員理事にも伝えたいと思いい、早速、記入していただいたコメントを一つ残さずパソコンに打ち込んで送付すると、「準備や手配で大変だったけれどやり甲斐があった」という声に戻ってきました。皆様からいただいた貴重なコメントは、次の大会のための参考にするのだけではもったいない、会員の方みんなで分け合おうということになり、簡単にまとめてみました。

良かった点

1. 研究論文発表はさまざまな分野からの興味深い発表が多かった。
2. 教師研修会は日本国内外で活躍されている講師の方が、すぐに役立つ内容を分かりやすく説明してくださったりデモで見せてくださったりして、色々なアイデアを得ることができた。
3. 会全体の進行、運営がスムーズだったし、雰囲気も暖かくアットホームだった。
4. 色々な所から来ている参加者と情報交換、親睦の機会を得ることができた。
5. 懇親会の参加者の方々の方言スキットは振興会のカラーが十分に出ていて楽しかった。

発表者へのアドバイス

1. 時間厳守し質疑応答の時間を必ず設ける。
2. パワーポイントを使つての発表でもハンドアウトを配る。
3. コンピューター機器を使う場合は、発表の前に問題がないか確認しておく。もしもという場合のことも考えて別の方法も準備しておく。

参加者へのアドバイス

1. 研究発表中の会場への出入りは慎む。
2. 会場のテーブルや椅子の準備があるので、参加者は前もって申込みをしておく。

その他、会場の設備、研究発表の数や内容、プログラムに関してご意見やご感想を数多くいただきました。

今後取り上げてほしいテーマやトピックの欄にはこの先十年ぐらい使えるほど、盛りだくさんのアイデアがありました。文法、聴解、漢字指導、教授法、継承語教育、各地域の日本語教育事情、文化、テクノロジー等々。これからの大会の参考にさせていただきます。

仕事や勉強会などで集まる機会のある方を除き、会員のほとんどは一年に一度の大会で顔を合わせるだけです。でも会えばすぐに一年間の空間が吹っ飛んでしまいます。初めて参加された方でも大会が終

わる頃には家族の一員として忘れられない人になってしまう、そんな家庭的な雰囲気が CAJLE のいいところだと感じています。来年もまた、海を渡り、大平原を越え、おとひめ様とひこぼし様のように一年に一度の再会を果たしましょう。

最後になりましたが、アンケート記入に協力してくださった皆様、ありがとうございました。

ワイヤーなしの 新しい矯正導入 invisalign

☆ 透明：つけているのがわからない

★ 違和感なし

☆ 取り外し可能：

- ・歯みがき簡単
- ・口腔清掃容易
- ・「食べ物」気にせず食べられる

白藤歯科の保険適用できます。
ご相談の予約お待ちしております。

白藤歯科

#208, 2175 Sheppard Ave. East,
North York, Ontario M2J 1W8
Tel: 416-490-8238

特別寄稿

Garden City・ビクトリアへようこそ

野呂 博子（ビクトリア大学）

カナダの最西端に位置するバンクーバー島の南部にあるビクトリアはブリティッシュ・コロンビア州の州都であり、Garden City と呼ばれる閑静な町です。三方を海に囲まれたビクトリアは「小さな古きよき英国」として知られています。19世紀のロンドンのような街並み、美しく手入れされた庭園など往年の英国のイメージが、まだここには残っています。一年中、穏やかな気候、体の不自由な人やお年寄りにもやさしい都市計画、そしてなんととっても風景のすばらしさが多くのカナダ人にとって理想的リタイアの地である理由でしょう。

来年の8月19日から22日までの4日間、CAJLEの年次大会をこのビクトリアで開催する運びになりました。会場は地元大学であるビクトリア大学ですが、カナダのハワイともフロリダとも称されるこの美しい町にぜひ多くの方がおいでになりますように、簡単に町の見所を紹介させていただきます。

ビクトリアの魅力1：庭園めぐり

ビクトリアで最も有名なブッチャート・ガーデンへは必ず訪れましょう。セメント王のブッチャート夫妻の趣味から始まった庭園も今では6万坪にも広がっています。四季を通してさまざまなお花が咲き乱れ、また夏は週末に花火大会があるので特にお勧めです。その他バラ園が有名なガバメントハウスやビクトリア大学内にあるフィナティー・ガーデンなどがあります。とくにフィナティー・ガーデンは入場料なしで広大な土地に植えられた植物を愛でることができます。石楠花愛好家の間ではとても有名だそうです。

ビクトリアの魅力2：「古きよき英国」を楽しむ

英国の習慣であるアフタヌーンティーを供するレストランも数多く見られます。定番のエンプレスホテルでのアフタヌーンティーはちょっと高めですが、ロビーからは美しい芝生の前庭越しに港や街燈に下げられた美しいハンギングバスケットの眺めも楽しめます。市内からすこし足を伸ばし、英国調の建物が並ぶオークベイまで行くと、ブレザリング・プレースのアフタヌーンティーはボリュームたっぷりでお得です。一人分のアフタヌーンティーを友達とシェアすることができるほどで、実は私のお気に入りです。ここはほかに、英国のパブ風メニューもお勧めで、Steak and Kidney Pie や Fish and Chips などが美味なのです。

ダウンタウンの Fort St. はアンティーク屋さんが並んでいて、見ているだけでもとても楽しいところです。一説によるとビクトリアの骨董はとてもお安く、ヨーロッパの骨董商が買い付けに来るとのこと。この通りにはオークションハウスが二軒あり、週に何回かオークションを開催しています。高級品からガラクタまであります。私も、一度家具をオークションで競り落としたことがあります。オークションの直前まで品物を展示しているので、じっくり見て、検討できる時間があります。入場は自由です。時間があれば是非体験してみてください。一味違った観光になること、間違いなし。

ビクトリアの魅力3：自然と親しむ

会場のビクトリア大学キャンパスやその付近には兎、鹿がたくさんいます。ちょっと、ワイルドなど

ころでは、クーガーも近くに隠れているとか。また、少し歩くと海なので、Killer Whale (鯨・しゃち) やアザラシが見られることもあります。いろいろなところに Trail があるので、気軽に散歩やハイキングが楽しめます。Whale Watching のツアーも数多くあるので、興味のある方は参加してみてもいいですか？

ビクトリアの魅力4：ネイティブ文化に触れる

この一帯はコーストセーリッシュ族が居住していたところで、居留地がバンクーバー島全体に散らばっています。ロイヤル・ブリティッシュ博物館に歴史や工芸品の展示がありますし、ビクトリアから車

で1時間半のダンカンという町ではトーテムポールが数多く見られます。ネイティブ文化センターもあり、そこで展示を見たり、実際に先住民の人達の話が聞かれます。ちなみにビクトリア大学には先住民の言語、文化などを研究する学者が多く、研究センターまであります。

以上、簡単にビクトリアの魅力についてご紹介させていただきました。多くの皆さんが大会参加に加えて、避暑や観光も兼ねてビクトリアを楽しんでいただければと願っております。では、来年の夏、お目にかかるのを楽しみにしております。

万年青年の「草の根日本語教育」

高橋 和比古

今年の春に急逝された石田幸三先生は、生前に親しい人から「万年青年」と形容されていた。

人の若さを単に生を受けてからの年月で計るのならば、確かに石田先生も老齢の入り口くらいにあったらう。しかし生前の先生を知る人は、細いのががっしりとした体つきにびんとはった真っすぐな背すじ、さらに加えて、誰に対しても情熱的ともいえる話しぶりに「万年青年」の意を感じたことだらう。実際、私も、

「私は一日に5時間寝ればいいのです。」

「一日一食でもすむんです。」

と先生から直接うかがった時には、脳裏を「青年」どころか「鉄人」という言葉が走ったものだった。

石田先生に初めてお目にかかったのは、確かCAJLEの第一回総会(1988年)、つまり設立総会だったと思う。CAJLEの記録によればこの総会の出席者は23名だが、その内の一人が石田先生であり、またもう一人が私だったことになる。

その時には既に「グエルフの石田先生」と言えば

カナダの日本語教育界ではかなり著名であり、当時「家庭の事情」で日本語教育に首をつっこみ始めた新参者の私でもすぐにそのお名前を知ることとなった。地元で日本語学校を開設しようと努力していた私に、「グエルフに日本語を教える先生がいるそう」との情報が入ってきたのが先生の存在を知ることになった。その頃、先生は既にご自宅から車で1時間もかかるトロント日本語学校に、週末ごとに通って教鞭をとっていらっしやったが、さらに地元でもプライベートなクラスを開催し、日本語教育を定着させようと努力されていたのだった。先生がグエルフにお住まいで、私とその隣のウォータールーに住んでいるという地理的な理由から、その後、親しくさせていただいた。

ある時、

「よかったら授業を見に来ませんか」とお誘いをいただき、ある日の晩に出かけてみると、教室はあるレストランで、先生と成人の生徒が数人、空席

の多い店内の片隅を使って授業を行っていた。周りには食事をしている客もあり、もちろん授業には劣悪な環境であったが、それでも「教室がどこであっても日本語を教える！」という先生の心意気を感じ、感銘を受けた。その後の私は、「草の根」という言葉をきくと、この石田先生の「草の根日本語教育」を思い出す。

1986年から教鞭をとられたトロント日本語学校での先生の貢献と逸話は、同学校発行の月刊校内誌、2004年4月号に多々述べられているので、ここでは省いて話を戻すが、CAJLEの設立総会で、石田先生はさっそく理事に推挙され、1994年まで理事を務められた。この時には、

「私が理事を引き受けたのはね、理事がトロントの人ばかりだとCAJLEはトロントの組織だと思われるかもしれないでしょう？いや、そうじゃないですよ、という証明みたいなもんですよ」とおっしゃっていたのを思い出す。

さらには1990年から2年間は副会長として中島会長を補佐し、その後は広報担当の理事を引き受けてくださった。私にとって特に思い出になっているのはこの「広報担当」で、私も広報担当として和文のニュースレターを担当する一方、石田先生は英語のニュースレター担当であったことだ。私のほうが記事の書き手に恵まれたのに対し、英語を母語にする会員があまりいなかったCAJLEで英語のニュースレターを発行するには先生も苦勞されたようだった。また、掲載記事の中には和文からの翻訳もかなりの量があり、ある時、

「先生、ボランティアでやるには大変な仕事量ではないですか」と私が言うと、

「いやね、私が大まかな訳をして、あとは家内に直してもらいますよ」ということであつたから、この頃の英文ニュースレターは先生ご夫妻の合作であつたのだろう。

本職は化学者であつた先生は、オンタリオ州の農林省に務めながら日本語教育を続けられていたが、

今から数年前に早期退職の道を選ばれた。

「家内と二人、かつかつ食べていかれる年金は確保しましたから」とおっしゃっていたが、この時を満を持して待っていらつしゃつたのだと思う。その後は地元の高校を中心に夜間の日本語コース開設を成し遂げ、自ら教壇に立たれた。この頃、しばしば拙宅に教科書を調達にいらしたものだ。所属される教会がウォータールーだったので日曜日のお昼過ぎにお寄りになることが多かった。最後にお目にかかった時には、「私は教えることはかまわないのですが、生徒の数集めが大変でね」とおっしゃっていた。この意味は、正規の学校教育の中で日本語を教えようとする、決められた生徒数を確保する必要がある、そのためには地元の各高校を回って勧誘のポスターを貼ったり、あちらこちらの企業や職場に協力を依頼せねばならず、これが大変な仕事だということなのだ。このあたりが人口の多いトロントと、先生が住む小都市グエルフとの差でもあるのだが。私はこの言葉を聞いていよいよ「草の根」の感を強くもった。

しかしここでへこたれるような「万年青年」の石田先生であるはずはなく、これからどのように地元で日本語教育を広めていくか、作戦を練っていらつしゃつたのではないかと思う。志の半ばにしての急逝で、先生を知る私たちにも言葉がないが、先生も口惜しい思いでおられるのではないだろうか。それともいつもの口調で、「私はね、精いっぱいがんばって生きたからいいですよ」、とでもおっしゃるだろうか。これも先生らしい言葉だが。

CAJLEの発展と共に定着してきたカナダでの日本語教育。先生は大学で教鞭をとるといふような大道は歩まれなかったが、地元での草の根教育に力を注がれた。CAJLEでは黎明期の会をささえ、さらにトロント日本語学校では日本語から一歩進んで日本文化・歴史までを講義され、多様なあり方でカナダの日本語教育に尽力してくださった。平坦であつたはずはない道を飄々と、我が道はこれとばかり

に行く先生の背中を見て勇気付けられた人は多いと思う。勿論先生の数多い生徒たちも含めてである。

CAJLE は大切な人を失ったが、先生が蒔いてくださったこれらの種を育み、開花させていくのが、

私たちができる先生への最善の恩返しではないだろうか、と思う。

ありがとうございました、石田先生。
合掌

連載

短歌に詠まれた日本語教育の現場 (全4回)

鵜沢 梢 (レスブリッジ大学)

これから4回に渡って「短歌に詠まれた日本語教育の現場」というテーマで、日本語教育に関係のある短歌を毎回一つずつ取り上げ、日本語教師の抱える問題、喜び、あるいは悲しみなどを書いてみたいと思います。取り上げる短歌は主に私の作ったものですが、他の方の短歌も取り上げてみたいと思います。

私の日本語教師歴は20年以上になります。大学院の学生だったときに日本語を教え始め、それ以来、カナダ、アメリカの大学で教えてきました。その間、色々なことを体験しましたが、私の感じたこと、考えたことは短歌にして短歌雑誌等に発表してきました。

私の作歌歴は15年くらいです。バンクーバーに住んでいた時に短歌の勉強会に誘われたのがきっかけです。その勉強会がとても面白く、かつ短歌も思っていたより簡単に作れるものだと分かったので、それ以後レスブリッジに移り住むようになってからもずっと短歌を作っています。現在は東京にある「心の花」という短歌結社に属していて毎月短歌を8首作り提出しています。(この結社には俵万智のように知名度の高い歌人もかなりいます)。数年前に『カナダにて』という歌集も出版しました。というわけで、私は一応、歌人でもあるわけです(エヘン)。日本の短歌研究社という短歌専門の雑誌社が毎年発行してい

る短歌年鑑にも歌人として名前が載っているんですよ、念のため。

・習いたる日本語どれもていねいで
馬鹿にされるとマイケルこぼす

私がどんな短歌を作っているか、ですって？上記のような大変分かりやすい短歌です。私の歌集を読んだ妹には「これが短歌なの？だってどれもみんな分かるじゃない」と変なコメントを貰いました。しかし上記の短歌は朝日新聞に連載されている大岡信の「新折々のうた」に取り上げられ、その後は、岩波新書の『新折々のうた5』の中に収録されました。おかげさまでこの歌は結構、日本語教師の間では知られているようです。(日本から来た人に伝え聞いた話ですが)。しかし、どんな読み方をされているのかは知りません。

それで今回はこの歌を通してみた日本語教育についてお話ししたいと思います。この歌は10年くらい前に作られたものです。その当時、一般に出回っていた教科書はどれも「文法の構造を教える」ということが主目的であり、どれも、「です、ます」体のていねいな日本語しか教えていなかった、と思います。助詞の省略も、友達同士で話すときのカジュアルな日本語も、教科書に載せるには不向きだと考えられていたのだと思います。私自身も丁寧なきっちりした日本語を学ばせるのが日本語教師の使命だと

考えていました。学生が友達と話せる日本語をもっと教えてほしいとか、スラングも習いたいとか言っても、日本語は基礎が大切だからと言って取り合いませんでした。それでもなんとなく、気になっていたのでしょうか、上記のような短歌が出来てしまいました。マイケルというのは、特定の学生を指しているわけではなく、日本語を勉強している一般の学生を「マイケル」という、どこにでもいそうな学生の名前にして表したものです。

この短歌を作ってから数年後にレスブリッジ大学で教鞭を取ることになり、教科書も自分で選べる立場になりました。それで、数種類の教科書を読み比べ、筑波大学で開発された『Situational Functional Japanese』という教科書を使うことに決めました。理由はカジュアルな日本語、女性語、男性語、助詞の省略などが入門の段階から「です/ます」体の日本語と共に導入されていたからです。これは学生に混乱を与えるのではないかと心配もしたのですが、特にそんなこともなく、学生は自分で自由に使えないにせよ、日本語には先生と話すときの言葉と友達と話すときの言葉、話し言葉と書き言葉、女性語と男性語があるのだ、ということは入門期の段階で理解できるようになりました。

助詞も会話では省略したほうが自然なことも教えました。しかし、これは日本語教師にとってまだまだ難しい問題です。会話ではどの助詞も省かれるわけではありませんし、「助詞省きの文法」というのがあるのかどうか分かりませんが、私の知る限り、誰もこれを研究している人はいないようです。筑波の教科書でも助詞を省いた会話文は載せても、どんな助詞がどんなコンテキストで省かれ、どんな助詞は省かれない、というようなルールは明記していません。これまでの日本語教育の現場では、教師は助詞を教えるために必要以上にはっきり、くっきり発音していましたし、助詞の省略なんてとんでもないことでした。私自身、学生が助詞を抜いた文章を作れば、やっきになって、助詞を入れさせたもの

です。（ま、今でも、新しい助詞を導入した直後はそうですが。）しかし、会話の時は助詞を抜いた文を発話しても、意味が分かるかぎり、無理に助詞は入れさせません。かえって、助詞を使うと不自然な会話になってしまう場合もあります。例えば「先生、これ、教えて下さい」というのはとても自然な日本語ですが「先生、これを教えて下さい」は特別なコンテキストの中でしか使われなと思います。

また、「朝ごはんは、コーヒー飲んで、トースト食べて、、、」というような助詞抜きの会話は、普通の日本人が日常、口にしているのではないかと思います。というわけで、カジュアルな日本語、自然な会話を入門期から導入したおかげで学生に「教室で習った日本語はどれも丁寧すぎて、友達に馬鹿にされるから、友達と話せる日本語をもっと教えてほしい」と言われることはなくなりました。

現在では、20年前とは比べ物にならないくらい、色々な教科書が出回るようになりました。文章の構造とか文法を教えるためだけの教科書は少なくなったと思います。それでも、入門期は、です/ます体のみ、会話文は助詞をすべて入れた不自然なもの、「あなた」という、日本語ではほとんど使われない言葉をわざわざ入れてあるもの、といった教科書はまだまだ存在します。これは学生の言語学習能力をあまりにも低く見ているのではないかと、私は思います。英語圏の学生も中国語圏の学生もちょっと説明すればちゃんと分かってくれます。ですから教室で学生に「あなたは、あなたは、、、」などと呼びかけられて、慥然とすることもなくなりました。

教科書を選べる立場にいない先生は、厳しいですね。それでも、ご自分で説明を付け加えたりして、少しでも自然な日本語を教えることは可能だと思います。私の作ったマイケルの歌が日本語教師の間でどのように読まれているのか分かりませんが、少なくとも自然な日本語を教えることは教室でも重要であるということに気付いていただけたら、幸いです。

Nihongo Circle : Specializing in Japanese Imports



なんでも買い付けいたします。便箋からコタツまで。

雑誌の講読も受け付けます。お問い合わせください。

Nihongo Journal 購読も OK! 音楽 CD、DVD も OK!

アルク社 「日本語教師養成通信講座」もお世話いたします

Gift Ideas from Nihongo Circle

電子辞書 (Canon Word Tank、各種)

雑誌 購読予約 1年間

「にほんごジャーナル」年間購読券

「必勝」はちまき

「英語で歌う日本の歌 (Japan Times)」; CD 付

Quick & Easy クックブック : 15 タイトル

Nihongo Circle 商品券

バイリンガル・まんが「ラブひな」等

日本文化ステッカー

50 音図表下敷き

にほんごアート・キャラクター・グッズ

など、など

New!

お問い合わせは、Nihongo Circle Toronto Office

1-416-961-5510 (ysugi@sympatico.ca)

<http://members.rogers.com/nihongoc/Nihongo.html>

Nihongo Circle @ eBay 在庫処分中! (User ID: nihongoc)

<http://search.ebay.ca/ws/search/AdvSearch?sofindtype=2>

>> 振興会々員による名著の数々 <<

Nihongo Circle 推薦図書

- 好評既刊・金谷武洋 (振興会副会長) 著「英語にも主語はなかった」等 主語3部作
- 好評既刊・楊曉捷 (振興会理事) 著「鬼のいる光景 — 『長谷雄草紙』に見る中世」 (角川叢書)
- 好評既刊・中島和子 (振興会名誉会長) 著 増補改訂・「バイリンガル教育の方法」 (アルク)
- 好評既刊・中島和子 (振興会名誉会長) 著「言葉と教育」 (海外子女教育財団)
- 好評既刊・鶴沢梢 (振興会理事) 著「〈日本語〉作文とスピーチのレッスン」 (アルク)
- 好評既刊・王伸子 (振興会理事) 著「音声、語彙、文字・表記」 (東京法令出版)

《留学生と日本語》 第5回

日本事情の粹組み・・・日本語教育につなげるために

王 伸子（専修大学）

カナダに来てから半年以上経ちました。4月に到着して、私にとっては真冬に逆戻りしたような春先を過ごし、6月最初の満月が来たら春の訪れと言われながら、春だか冬だかはっきりしないような季節も通り過ぎました。さらに、子どもたちの長かったはずの夏休みもあつという間に終わり、さすがに美しい紅葉、と目を細めている間にドンと寒くなり、ついに雪も降り始めました。

滞在の残りの期間も半年をきっています。9月の新学期が始まってから、ここ、ニューブランズウィック州マウント・アリソン大学で、大江都先生の日本語初級の一クラスに、毎回出させていただいています。

つい最近、こんな授業の一場面がありました。1月、2月・・・という月の言い方を覚えながら、

「クリスマスは何月ですか」

「クリスマスは12月です」

というような対話を練習していく授業だったのですが、その行事や祝日にカナダのカレンダーが使われていました。

「リメンバランスデーは何月ですか」

「リメンバランスデーは11月です」

という具合です。クラスは16名、学生の内訳は、カナダ人9名、アメリカ人4名、中国人3名。何番目の月かということがなかなか出てこなくて、1、2、3・・・と数えながらしどろもどろの学生も。自分が答えると、今度は隣の人に質問していくわけですが、ある学生が、

「カナダデーは何月ですか」

と質問しました。質問されたのは中国人学生。

「えー、うー・・・カナダデーは・・・」

と考えてから英語で、

「前回の授業に欠席したのでわかりません」

そのとたん、クラスの半分近くの学生が思わず笑い出しました。さわやかな笑いではあったのですが、その中国人学生には少々気の毒でした。要するにカナダデーがいつかということは、習うことではなく、知っているべき祝日だということなのでしょうが、世界に名だたる行事でもないのに、カナダの大学に入学したばかりの外国人学生が知らなくとも何の不思議もありません。しかし、逆に言えば、カナダに留学したのだから「カナダ事情」として、カナダデーが7月1日であることぐらいは知っておくべきだったのかもしれませんが、もちろん、一度カナダデーを過ごせば、あの印象的な1日は忘れることはないと思いますが、事前にちょっとした知識として知っておいても損はないでしょう。

この出来事を、自分の「一般日本事情」の授業に重ねて考えながら、少し、教える内容の粹組みについて整理してみたいと思いました。

まず、大きく分けて、どこで何を教えるのかということですが、私が日本の大学で担当する科目では、日本に滞在している外国人学生を対象に、日本の事情を教えます。この場合、身の回りのことは題材にしやすいということと、学生もすぐに今の生活、大学での講義の事柄に結び付けやすいという利点があります。

一方、海外ではどうでしょうか。日本事情のみを教える時間はなかなか取れません。発音、文字、文法といったことばの決まりを教え、練習するのに精一杯です。しかし、日本語を選択した学生は、少なからず日本に興味を持っているようですから、いろいろと日本のことも伝えながら教えて行きたいと、誰もが考えていると思います。ワークショップのような形でもいいと思いますが、できれば日本語のクラスと切り離して、専用の時間が設置できるといい

ですね。私が教える日本の大学では、日本語科目は外国語科目として1科目2単位の扱いですが、「一般日本事情」科目は4単位取得できる講義科目となっています。カナダでも、英語（あるいはフランス語）で講義する「日本事情」を別枠で設置できれば、あるいは、その科目を履修した後に日本語科目に興味を持つ、ということが期待できるかもしれません。この場合、日本史や日本経済などという日本関係の専門科目とは別に、「日本事情」を設置できれば、という仮定での話です。

もちろん、予算の厳しい折柄、「それができればねえ・・・」という声が聞こえてきそうな気もしますが、もうすでにそのような試みをなさっている大学もあるのではないのでしょうか。もしありましたら、ご一報ください。ぜひ、情報交換などをいたしましょう。

日本語コースの設置、運営について言えば、年少者を対象とする日本語クラスから大学の日本語科目まで、私たちに直接かかわりのあるのは何といても学習者数、科目の履修者数です。日本国外での現場でも、日本語に興味を持ってもらえるよう、積極的に考えていく時期に来ているとも思います。

話は少々横道にそれますが、現在、中国政府が外国人に対する中国語教育に本腰を入れ、大きなプロジェクトを展開しようとする気配があります。これまで、在外華僑子弟や帰国華僑の中国語教育にはそれなりの力を入れていましたが、ここに来て、世界各国に「孔子学院」という中国語学校を設立し、本国から中国語教師を送り込み、大々的に中国語学習者数を増やそうとする動きがあります。すでに、華僑の多い東アジアおよび東南アジアのいくつかの国では具体的な学校設立案もあり、当該政府の理解も得られたということです。その様子を見て他のアジア、ヨーロッパ諸国等々に計画を広げていくと発表されています。中国はこれまで、本国内の55の少数民族に対する政策の中で、言語政策の有効性を長い歴史の中で学んできた国であり、その言語政策は今

日も現在進行形で行われています。それらの蓄積がある上に、人材においては、実にカナダの40倍以上という人口を有する国ですから、本気になって走り出したら、どこの国においてもあつという間に日本語教育と競合する力をつけてくるでしょう。日本が、奥ゆかしくもJETプログラムなどで徐々に親日派を作り出していくスピードとは比べものにならないかもしれません。来年夏には、第一回世界中国語大会が北京で開催されるとすでに報じられています。

私たち、日本語教育にたずさわる者も、とくに海外では、これから「攻め」の姿勢で取り組む必要があるかもしれません。

話をもとに戻して、日本事情ですが、日本では身の回りの事柄を題材にしやすくと書きましたが、海外ではその逆を行き、身の回りの事柄から日本が浮かび上がってくるような内容を考える、というのはいかがでしょうか。なぞかけみたいな文になってしまいましたね。あまりにも派手な行事やいかにも日本的なもの、あるいは、日本といえばマンガというようなことではなく、身の回りのことを日本のそれと照らし合わせて考える、というのも一考かと思います。具体的には、今、材料を集めつつあるので、これについては次回にお話したいと思います。

このように、日本国内で教える場合と、海外で教える場合とではもちろん内容が異なり、さらに、海外における現場でも日本事情について教えるクラス、それによって日本に興味を持つことのできるクラスが持てると、方策上も有効ではないかと考えられます。

次に、内容の特徴と枠組みですが、例えばこれまでお話してきたような「ご祝儀」など日本の習慣に関することは、日本人が家庭で学ぶこと、一方、河川の名前などの地理や都道府県名などは、学校における学習項目です。両方の知識がバランスよく、いわゆる常識として蓄積されているのが成人の知識でしょう。日本人学生がそのような知識を学んできていると仮定して、それを到達目標に置き、授業を展

開していくというのが、私の考える「日本事情」のカリキュラムです。

日本以外の場所でこれらの内容を取り入れる場合は、学習者が必要とする内容は何か、あるいは日本、および日本語に対して興味を喚起するような内容はあるようなことかというリサーチと分析から始めるとよいと思われます。現在、CAJLEの会員は北米もしくは日本以外の国にもいらっしやいます。そうした国での状況もぜひ、ご報告ください。香港では、ス

ペインでは、またトルコではいかがでしょうか。学生に伝えている文化面の事柄、あるいはビジネス関係の習慣など、学習目的にそって教材に工夫をなされているのではないのでしょうか。そうしたみなさんの教材の中から、私も学びたいと思っています。1年に1回の大会での発表はもちろんのこと、このニュースレターの紙面も、そうした会員同士の意見・情報の交換に活用できるとさらに価値が高まると期待しています。

カナダ各地の学校めぐりシリーズ (8)

創立 55 周年を迎えた「トロント日本語学校」

トロント日本語学校 (TJLS) は今年で創立 55 年になります。本年度の児童部は 5 レベル 4 クラス、成人部は 7 レベル 11 クラス、生徒総数 230 名という我が校の最盛期を思わせるような規模となりました。TJLS は戦後の混乱と日本人への差別の中、日系子弟に日本語を継承語として伝え残したいという日系一・二世の尽力によって 1949 年に設立されました。

戦前には 40 を超える日本語学校がカナダに存在していたと聞いていますが、TJLS はその中で戦後いち早く学校として再開し、当時のトロント近郊の日系人コミュニティーのよりどころとしても多くの人たちで賑わっていたと言います。60 年代には、オーデ校 (現所在地)、スカボロー校、エトビコー校と三つの分校を抱えるほど大きく成長し、現在の成人部の基礎となった成人クラスも 60 年代に誕生しました。しかし、1970 年代以降の日本の高度成長と共にトロントに在住する日本人の背景が多様化すると、日本語に対するニーズや教育方針にも違いが出、それまでの学校の体制では立ち行かなくなりました。そういった時代の要望から日本政府、日系企業関係者の子弟のための機関として現在の

ハウ 博美 (トロント日本語学校)

補修授業校が TJLS から独立、次いで新移住者日系子弟を中心とした国語教室 (現在はトロント国語教室) や、ヘリテージ日本語学校が独立していきました。現在トロントにある殆どの日本語学校は TJLS を母胎として枝分かれしていった学校である旨、先人より聞かされています。

私が TJLS に教師として採用された 1985 年頃は丁度北米での第 2 次日本語ブームと言われた時代でした。その当時でも TJLS はまだまだ児童クラスが学校の主体でしたが、その年から成人クラスは 3 レベル (初級・中級・上級) 4 クラス編成になり、以後年毎にクラスが増え続けることになりました。90 年代に入る頃には現在の成人部の原型が出来上がっており、成人部だけでも常に年間 140~150 人程度の規模を維持していたと憶えています。また生徒数ばかりでなく、毎年オンタリオ・スピーチコンテストで入賞者を輩出するなど、民間の日本語学校としての質も充実してきました。成人部に在席する生徒はほとんどが日本語を外国語として勉強する人々です。この成人部の日本語クラスの成長と充実には児童部の日本語教育にも大きく影響したと思います。日本語を JFL (Japanese as a foreign language)

として教える日本語児童教育がトロントで本格的に始まったのは TJLS からではなかったでしょうか。

TJLS が JFL としての日本語教育を積極的に押し出したこの 20 余年の生徒たちの背景も刻々と変化してきました。80 年代の成人部では日本人の配偶者や友人が日本語学習のきっかけであったり、日本の伝統文化・芸術への興味が動機になっている生徒が大勢を占める中で、少しずつビジネスの世界の人々が入ってきました。丁度北米では日本の経営システムに大きな注目が集まり、マスコミでもいろいろ取り上げられていた頃です。また日系の会社で現地採用されているカナダ人たちも必ずクラスの顔ぶれに入ってきました。

80 年代後半以降、日本の通貨円が高騰すると日本で働く外国人（英語教師も含めて）の人口が急増しました。そして、これら日本定住の経験者のカナダ帰国に伴い、よりレベルの高い民間の日本語教育の現場が求められるようになりました。TJLS の中級・上級クラスには日常会話のみならず、ビジネス・文化のクラスなど独自のユニークなカリキュラム体制が出来上がりましたが、これも時代の要請に自然に応えたものでした。

90 年代に入ると中国系の成人や大学生が急増してきました。日本語学習の動機を聞いてみると、日本の TV ドラマのファンが多いのに驚かされました。丁度日本の若者文化が次から次へと流行語を作り出し、新造語やカタカナ語が氾濫し出した頃でもあり、成人部を教える教師陣の間では日本の生きた言葉や社会の時代感覚をつかむため（？）頻りに TV ドラマのビデオテープを交換し合うことになりました。また高校生の生徒数もゆっくりとではありましたが、少しずつ確実に増えてきていました。日本とカナダの高校レベルの交流が活発になって、様々な高校生対象の日本語プログラムが増えた頃でした。

そして 90 年代後半～2000 年代になると圧倒的に日本語学習への動機に日本のアニメ・漫画、TV ゲ

ームを大学生・高校生、一般成人までが挙げるようになりました。ドラえもんを知らずに成長した香港・台湾出身の中国人はおらず、ポケモンカードを集めていない子供はカナダに存在しない（！）時勢になったのは誰もが知るところです。

また近年少しずつ目立ってきたのは、日本で学校教育を受けた外国人家庭の子弟が TJLS に入学するようになってきたことです。日本に一時定住した外国人家族が新たにカナダに移民として移住し、子供達の身についた日本語を継続させるために子供を連れて来たり、時には親子揃って日本語を勉強する家族が増えてきたことです。これらの動きは児童部に新たな方向性を与えることになりました。21 世紀に入り、再び日本の国語の教科書を使用する日本語イメージのクラスが誕生しました。現在、児童部は従来から続く JFL のコースとこの国語クラスの二本立てになっています。

この 55 年をざっと振り返ってみただけでも、TJLS が時代の要望と共に歩み続け、変貌し続けてきた様子が良くわかります。しかしこのように様々な変化や問題に直面しながらも柔軟に対処し存在し続けることができたのは、創立以来陰となり日向となり学校を支えてくれた維持会の存在があったからこそでした。維持会はその名の通り、元々日系社会の有志や父兄たちによって TJLS を維持していくために作られた組織です。大勢の日系一・二世の方々の寄付金やボランティアによって学校運営は支えられてきました。TJLS 伝統の様々な学校行事、クリスマス・コンサート（学芸会）、ダンス・パーティー（寄付金集め）、ピクニック（運動会）、そして数多くの奨学金は維持会の援助無しには続けてこられませんでした。

ところが 80 年代後半になると維持会の会員たちの高齢化・死去による欠員が問題化してきました。この状況を受けて 1987 年に誕生したのが学校理事会でした。学校理事会は成人クラスの生徒・児童クラスの父兄・それらの OB から毎年選出されます。

現在では実質的な学校運営と経営はほとんど学校理事会が責任を持ち、維持会は主に特別な財政援助やアドバイザーとして学校を支えています。また維持会は非日系人のメンバーや新世代の参入も奨励し、組織の活性化も実現してきました。各レベルの具体的なカリキュラムや学校行事の内容は全て校長を含めた教師会で決められます。近年この三者の連帯によって経営的にも機能的にも非常に安定した学校になっています。これは生徒の立場から見れば、安心して長期間日本語を学べる理想的な環境が整った学校であると言えるのではないのでしょうか。現職の田中登志枝校長は第4代目校長で今年には在職25年になります。1966年に教壇に立たれて以来40年近くを TJLS と共に歩んできました。維持会、学校理事会、教師陣この三者の連結のパイプ役として、日系人と非日系日本語学習者のパイプ役として、なくてはならない存在になりました。また世間の政治に巻き込まれることなく、長年我が校の独自性を守りながらも各界の支援を保ち続けてきたのは、田中校長の采配に頼るところが大きいと感じるのは私だけではないはずです。

私が TJLS に最初に来て以来、一貫して感じていることは変わらぬ学校理念です。より多くの子弟に質の高い日本語教育をという先人の志は世代が代わっても現在まで強く学校運営に受け継がれています。それは例えば誰しもが通いやすい立地条件の確保や、より多くの人々が日本語を学ぶ機会が得られるようにと出来る限り抑えられ続けている授業料、(授業料が安すぎる?という人もいます) 数々の奨学金援助、日本語教育に付随する様々なアクティビティへの理解や教材への惜しみない経済的援助です。またこの創立以来の志は現場教師にとっても代々生徒本位のカリキュラム作りとして反映されています。生徒自身のニーズにあう最も効果的な日本語教育とは何かを目指して、教授法、教材に対する研究や意見交換のために多大な時間が教師

会に費やされています。熱心で経験豊かな教師が揃っていることは在校生徒から聞かされる特徴の一つと言っても良いのではないのでしょうか。

また文字通り明るく楽しい教師陣や理事会の気質は、良心的で暖かな学校の伝統的雰囲気や代々伝えていきます。時代の変遷の中でも変わらず守られてきた独特な校風は日本語学習の場としてだけではなく、日本語愛好家のサロンの集まりの場としての側面をも発展させてきました。我が校伝統のコーヒー・ブレイク(コーヒー、お茶、クッキーのサービス有り)には、児童・成人全クラスが一堂に会します。教師陣・ボランティアも加え、老若男女混ざったの歓談風景は壮観なものがあります。児童部は3~4歳のプリスクール組から中学生まで、成人部は15歳の高校生から上は80歳代までの様々な年代層の生徒で構成されています。TJLS はあらゆる年代層が日本語を学べる生涯教育の場にもなっているのです。特に成人部ではレベルが細かく分かれていますので、各生徒に適したレベルにいつでも編入できます。学生から社会人へ、結婚・育児、転職・退職等ライフ・スタイルの変化と共に、それぞれの人生に合ったペースで日本語を学習できるのも TJLS ならではの特徴です。また TJLS の生徒は様々な動機と目的意識を持って日本語を勉強しに来ています。毎年バック・グラウンドや年齢、レベルを超えた生徒間の交流を見ていると、実に TJLS が言語のみならず、日本語を媒体とした人間交流の場になっていることをひしひしと感じます。

生徒、父兄、維持会や理事会のメンバー、教師、そして数多くの篤志家や日系の諸団体から長きに渡り、愛され支援されて55年続いてきました。多くの困難に遭遇し、時代の変遷と共に変化しながら55年が経ちました。これからも TJLS は変貌し続けるでしょう。未来の姿に思いを馳せながら、(これまでの歴史を何かの形で残しておけばと、)思いつくままに記憶をたぐってみました。

BULLETIN BOARD

2004年8月に行われた定例理事会において、役員改選が行われ、新役員が選出されました。それをもちまして、私の会長としての任務を終了させていただきました。3年間の任期中は、会員の皆さま、また関係機関の方々から心強い励ましやご助言をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

今にして思えば、理事として新米格の私が大胆にも会長をお引き受けしてしまい、それまでの活動や運営について、先輩理事の方々に伺ったりお知恵を拝借する場面も多々ありました。歴代の会長および会長代行が築かれたことを土台に、理事役員が一体となって新しい振興会の発展を目指すことができたのは、何よりも嬉しいことでした。

この3年間に振興会が行った新しいこととして、

- (1) 15名の理事の枠を最大数で選出し、その全員が役員として会の運営や年次大会の実行委員を務めたこと
- (2) トロント以外での年次大会の実施：昨年のカルガリー大会の実施、来年のビクトリア大会の決定
- (3) ホームページの開設・公開
- (4) ジャーナル CAJLE の年1回定期発行および会員への無料配付の実施
- (5) ニュースレターの広告掲載を本格的に行うべく、企業・団体への依頼および実施

などが挙げられるでしょう。これらの実施に貢献してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

最後に、会長代行を引き受けてくださった王伸子氏にお礼を申し上げます。私は一理事として、また一会員として、これからも振興会とおつきあいさせていただきたいと思っております。今後とも、どうか宜しくお願いいたします。

西島 美智子

何事も日々新しくなっていくカナダ日本語教育振興会の歩みですが、2005年の年次大会に向けて、すでに活動が始まっています。その1ページに貢献せよという励ましをいただき、このたび会長代行という要職に推挙されました。正直に申し上げれば、今回のことはまったく予期せぬ出来事であり、とくに正式には日本の大学に所属している私にとってはかなりの戸惑いもありました。このたび、西島美智子前会長が退かれるにあたり、後を引き継ぐに相応しい先生方のお名前が何人か候補にあがりましたが、さまざまなお都合からどなたもお引き受けできる状況になく、少しでもお役に立てるならと私のようなものをお引き受けすることになった次第です。また、2004年から2005年にかけての1年間、ニューブランズウィック州のマウント・アリソン大学に客員教授としてお世話になっておりますので、滞在中に少しでもカナダの日本語教育に貢献したいという思いもありました。任期は1年間で会長代行という変則的なものですが、皆さまの応援もいただきながらこなしていきたいと思っております。

これまで3年間、会長として大役を果たしてくださった西島先生には心より感謝申し上げます。カルガリー大学での大会開催、ホームページ開設、ジャーナル CAJLE 無料配布を始め、さまざまな試みについてリーダーシップを発揮してくださいました。また、このたび、ご都合により残念ながら理事の職から退かれることになった鶴沢梢先生、古屋賀子先生にも、在職中のご貢献についてあらためて感謝申し上げます。鶴沢先生は振興会のホームページ立ち上げから管理までを一手にお引き受けくださり、今日のホームページへとつなげてくださいました。古屋先生は書記として細かく正確な議事録を作成してくださり、理事会の運営にとって重要な記録を残してくださいました。本当にありがとうございました。これからも会員として、貴重なご意見とご支援をいただければ幸いです。

来年度の大会はビクトリア大学において行われます。昨年のカルガリー大学に続き、トロントを離れた場所での貴重な大会となります。研究発表、一般参加ともにカナダ国内外から多くの皆様のご参加があることを願いつつ、ビクトリア大学の野呂博子大会委員長を先頭に、すでに大会準備に入っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

会長代行：王 伸子

編集部便り

★ 今年の日本は猛暑、台風、地震と天災に悩まされた一年でした。住む所はもちろんですが、今まではあって当然と思っていた水や食料も手に入らず不自由な暮らしを経験された方が数多くいます。私事ですが、健康・頑丈だけがとりえの私が先日風邪で声が全く出なくなってしまいました。同僚は静かな研究室での仕事を楽しんでいたようですが、私は声の出せない授業の不便さをつくづく感じました。学生は OHP に写された説明を黙々とノートに記入し、「わかりましたか」と書かれたサインに、ただ首を振っていました。これから、ますます寒くなります。皆様もお体には気をつけて、良いお年をお迎えください。（サマレル）

★ 本号では、夏の年次大会関連記事にかなりのスペースを割いていることが、お分かりいただけると思います。文章にした物を読んでみますと、企画から実行まで、本当に大変な時間と労力を費やしていることが分かり、会役員である私でさえ、新たな驚きをもって読みました。また、来年夏の開催地であるビクトリアのご案内も載せる事ができ、来年の夏を楽しみにして下さる方が増えるのではないかと期待しています。日々寒さが増しているトロントから、皆様のご健康をお祈りいたします。良いお年をお迎えくださいませ。（杉本）

★ 久しぶりにニュースレターの編集作業に加わりました。チームで仕事をするのは、やはりとても楽しいです。自分が書いたものを他の編集メンバーに検討していただいたり、送られてきた他の方々の方々の原稿の校正を話し合ったりしながら、改めて、日本語の表現の多様性について考えさせられました。ニューブランズウィック州のような日本から遠く離れた「いなか」に住んでいる私には、とてもよい刺激です。このニュースレターをお読みくださった皆さまからもコメントがいただけると嬉しいです。私と入れ代りにニュースレター担当を離れられた谷原先生、今までありがとうございました。引き続き、ジャーナル編集で頑張ってくださいね！（西島）

★ 今号のニュースレターは予定よりだいぶ遅れて、ようやく出来上がりました。外は連日昼でも零下20度に迫る真冬、机の上には学生たちの録音テープやらレポートやらが山積みとなって、まさに時間との格闘です。年次大会をまとめるという大きなテーマを抱えていることもあって、各方面からの原稿がぜんぶ揃ったのは、つい数日前でした。いち早く原稿を寄せてくださった方々に申し訳ない気持ちを覚えながら、あらためて多忙な日常のなかで貴重な時間を割いて寄稿してくださる方々への感謝の気持ちでいっぱいです。なお、ニュースレター編集と共に、新たに専用のアドレスを取得した CAJLE ホームページの仕事にも関わるようにと指名されました。鶴沢先生が基礎を作ってくれたものを受けて仕事を続けることとなりますが、みなさんからのご支援をお願いいたします。（楊）

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2004年6月～2005年5月

年会費：連絡先がカナダの場合...CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合...US\$40.00、
上記以外の場合...US\$60.00（いずれも郵送の場合は小切手または money order で）

申込必要事項：氏名（日本語およびローマ字）、現住所、電話およびファックス（自宅、職場の両方）、
電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)
c/o NAJC, Toronto Chapter, 382 Harbord Street, Toronto, Ontario, M6G 1H9 CANADA
お問い合わせ：Tel: 416-516-8146（鈴木） Fax: : 416-926-0495（渡並）

（入会申込書は、ホームページをご覧ください。http://www.cajle.org）

カナダ日本語教育振興会（CAJLE）

ニュースレター・29号 発行日：2004年12月12日

編集：CAJLE Newsletter 編集部 Copyright: CAJLE (2004)